Mission 04

生物多様性×地球大

守分 紀子
自然環境局 自然環境計画課
生物多様性地球戦略企画室 室長補佐
平成12年入省

COP10議長国である日本の代表として、条約事務局へ乗り込みました。

私は、当時I種農学Ⅲ（総合職森林・自然環境に相当）の職種で採用された自然系職員（通称：レンジャー）で、これまで本省や近畿地方環境事務所の勤務地において、国立公園の保護管理、野生生物の保護等の自然環境保全に携わってきました。そして、入省から9年目の2008年11月。私はひとりカナダのモントリオールに降り立ちました。2010年10月に名古屋で開催され、日本が議長国を務めた、「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」。そのすべての運営をおこなう生物多様性条約事務局へ、日本の代表として派遣されたからです。生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。40億年という長い時間を経て、現在地球上には3000万種もの多様な生きものが存在すると言われていますが、これらの生命は一つひとつに個性があり、我々人間も含めて、すべて直接・間接的に支え合って存在しています。私たちが豊かな暮らしを続けていくためには、日本だけでなく世界各国が手を取り合って、この生物多様性を保全していく必要があるのです。この生物多様性という壮大なテーマを扱う条約事務局において、私の仕事をひとことで言うと、会議の開催国である日本と条約事務局のパイプ役でした。距離が離れている、言葉がちがう、そんな両者の意思疎通をスムーズにできるよう連絡調整していくこと。それが私の役目でした。

条約事務局には、世界中から集まったスタッフが100名ほど働いていました。前任者はいない、誰も知らない、もちろん仕事が用意されているわけでもなく、ただ自分の机があるだけ。まずはみんなに自分を売り込み、自分で関係をつくっていくしかありませんでした。同僚のオフィスを訪ね、打ち合わせやスポーツイベント、ホームパーティーにも積極的に参加し、自分の顔を売ることからはじめ、とにかくすべてが手探りでした。会議の準備を進めていくうち、「COP10の準備会合に日本政府から参加してもらいたいが適任者は誰か？」、「日本政府はどう考えているか教えて欲しい」など、同僚たちから私に相談ごとが舞い込んでくるようになりました。日本側でも海外からの参加者を受け入れる宿泊施設、警備、会場準備などが着々と進められ、常に情報を摺り合わせながら準備を進めていきました。条約事務局長がカナダから日本を訪れる時には、私がスポークスマンとしてスケジュール管理や取材対応などをとりしきりました。この様な仕事を通して、私は、日本と世界がつながるための潤滑油になりたい、そしてCOP10をきっかけとして、国内外の様々なセクターの人々に生物多様性の重要性について知ってもらい、行動の輪が広がるよう少しでも貢献していきたいと考えるようになりました。日本企業や地方自治体、NGOなども巻き込み、メディアにも取り上げられることで、日本国民の関心がCOP10に集まっていくのを感じ、私の気持ちもますます引き締まっていきました。

１７９カ国が歩み寄り、愛知目標が採択されました。

参加国１７９カ国。約１３０００人という条約史上最大の会議になったＣＯＰ10は、歴史的な成果をあげることになりました。愛知目標として、２０２０年までの新しい世界目標が決まり、さらに過去18年にわたり交渉が続いてきたＡＢＳ（遺伝資源へのアクセスと利益配分）に関する名古屋議定書が採択されたのです。ＡＢＳについては、最終日の前日まで、途上国と先進国の溝が埋まらず、深夜０時になっても合意案ができませんでした。それでも議長国の日本は、この交渉を妥結しなければならない使命があり、最後の賭けにでます。妥協するところは妥協し、途上国と先進国のバランスを整えた議長案をつくると申し出たのです。最終日の深夜、最後の全体会議をどう進めるかが重要で、私は議事進行を務める事務局員と、議会進行のシナリオづくりをおこないました。全体会議は、息をのむような張りつめた空気を会場に漂わせ、進行していきました。「大丈夫。日本はこういうことを考えているから」と、緊張している同僚と励ましました。

いよいよ名古屋議定書の議長案が審議にかけられ、気がつくと、拍手がわき起こっていました。歓声も上がりました。世界各国が国益を越えて地球益の下に一つになった瞬間です。奇跡的にも名古屋議定書は採択されたのです。途上国と先進国が長い時を経てようやく歩み寄った、とてもドラマチックな出来事を目の前にして、感無量でした。ちょうど丸２年、会議準備にかかわってきて、条約事務局の一員として今日のこの時を夢見てきました。『一人ひとりの仕事はとても地味かもしれないけれど、それぞれの役割をしっかりと果たし、積み上げることで必ずかたちになる。』そう実感した瞬間でした。

生きることは、生物多様性に影響を与えること。

自然をテーマに国際的な仕事がやりたかった。そして日本と世界をつなぎたいという想いがあった私にとって、この条約事務局での仕事は、まさに日々がその仕事でした。ＣＯＰ10の運営に携われたことは、私にとってこれ以上ないほどのやりがいのある経験になりました。会議開催期間中は、日々発生する運営上の問題解決や議長団との連絡調整、日本政府が主催した閣僚級会合の調整、日本側ＶＩＰが参加するイベントの進行など、気の休まる時もありませんでしたが、生物多様性保全にとって歴史的な場面に立ち会え、世界の国々がお互いの考え方を尊重し、合意するというすごいことを目の当たりにできたのです。条約事務局と日本の間だけでみても、物事の進め方や組織論のあり方がちがい、仕事を進める上で大いに戸惑いました。考え方も、やり方もちがう。でも、まずお互いがちがうことを知ることが重要なのだと実感しました。

日本がやっていることを世界に伝えつつ、世界の動きも日本に知ってもらう。地球はひとつ。つながっているじゃないですか。日本は島国で感じにくいかもしれないのですが、木材でも食べものでもいろいろな国から輸入しているので、それを消費すること自体が世界の国々の環境や生物多様性に影響を与えています。その様な地球規模の環境問題について、これから先も携わっていきたいと思っています。実は、私はもうすぐ母になります。次世代のため、私たちの今の暮らしを少しでもサスティナブルなかたちにしていくにはどうしたらいいのか、また豊かな生物多様性を将来の子どもたちに残していくためにはどうしたらいいのか、これからも地球大な視野をもって考えていきたいと思っています。